

洋13-69

「オブリビオン」 ★★★

2013（平成25）年6月2日鑑賞
TOHOシネマズ梅田

監督・脚本・製作：ジョセフ・コシンスキー

ジャック・ハーパー（元海兵隊司令官、無人偵察機ドローンの管理者）／トム・クルーズ

マルコム・ビーチ（レジスタンスの生存者のリーダー）／モーガン・フリーマン

ジュリア・ルサコヴァ（宇宙船の残骸にいた謎の女性）／オルガ・キュリレンコ

ヴィクトリア・オルセン（ジャックの妻）／アンドレア・ライズボロー

サリー（司令官）／メリッサ・レオ

カラ（女性のレジスタンスメンバー）／ゾーイ・ベル

ジュリアの子供／アビゲイル・ロウ

ジュリアの子供／イザベル・ロウ

サイクス軍曹（ビーチの右腕、ナンバー2）／ニコライ・コスター＝ワルド

グロウホールの生存者／デヴィッド・マディソン

2013年・アメリカ映画・124分

配給／東宝東和

<トム・クルーズがああ的美女と共演！こりゃ必見・・・？>

トム・クルーズが、『007/慰めの報酬』（08年）（『シネマルーム22』88頁参照）、『故郷よ』（11年）（『シネマルーム30』205頁参照）で注目のウクライナ生まれの美女オルガ・キュリレンコと共演。そこで、「こりゃ必見！」と思ったが、タイトルの『オブリビオン』とは一体ナニ？そこで調べてみると、物語の舞台は2077年。エイリアンの侵略を受けた地球にはもはや人類の姿はなく、機密保全のために過去の記憶を消された男ジャック・ハーパー（トム・クルーズ）に人類の未来が託されていた。そんな映画らしいから、こりゃ昨今ハリウッド流行のSFもの・・・？

半分義理で観た(?)トム・クルーズ主演の『宇宙戦争』（05年)が予想どおり(?)の期待はずれ!で星3つただけに、本作も・・・?その評論で私は「とはいっても全然面白くないわけではない。90%が異星人からの逃走劇の物語ながら、それなりに十分な娯楽性を満たす映画であることは認めよう。しかし、所詮それだけ・・・?」と書いた(『シネマルーム8』114頁参照)が、そんな私の心配は本作でも・・・。

<60年後の地球は?エイリアンは?人類は?>

導入部は地球の1,000m上空にそびえ立つステーション「スカイタワー」で、司令本部のサリー(メリッサ・レオ)からの指令を受けながら、美しいパートナーであるヴィクトリア・オルセン(アンドレア・ライズボロー)と2人で地球のパトロール任務に励むジャックの様子が描かれる。今から60年以上先の宇宙ステーションは美しいけれどもこんなに無機質なものかと考えたり、荒廃した地球を飛び回る「ドローン」という無人偵察機のメカに感心したりしながらスクリーンを見ているのだが、いかんせん地球を襲ったスカヴ(ハゲ鷹)と呼ばれるエイリアンの姿は見えないし、生き残った人類が移住したという土星の衛星タイタンの様子も教えてくれないので、感情移入はイマイチ難しい。

ストーリーが展開するのは、飛行物体の墜落を確認したジャックが司令本部の命令を無視して現場に急行し、そこでカプセルの中で眠ったままの状態にいる女性ジュリア・ルサコヴァ(オルガ・キュリレンコ)と対面してからになる。この女性は一体誰?実は一切の記憶が消されたはずのジャックは、夢の中で時々若く美しい女性の姿を見ていたが、カプセルの中から出てきた女性はその夢の中の女性とそっくり。こりゃ一体どういうこと・・・?

<モーガン・フリーマンの存在感に注目!>

モーガン・フリーマンは本当にいろいろな映画で存在感を示す名優だが、本作で彼は中盤の「あっと驚く展開」の中で、地球に残存していたグループのリーダーであるマルコム・ビーチ役で登場する。冒頭からしゃかりきになって働くジャックの存在感がなんとなく希薄(?)な中で、次第にこのビーチの存在感が際立ってくるのでそれに注目!もっとも、ストーリー的には人類はエイリアンには勝利したものの、核に汚染された地球には住めなくなったという設定なのに、なぜビーチたちはここで生活できているの?という疑問が解消できないから、多少の違和感が残るのはやむをえない。

もう一つあっと驚く展開は、墜落した宇宙船の中にあるフライトレコーダーに固執するジュリアの姿を見て、ジャックがその回収に協力したところ、実はジュリアはジャックの妻だったということが割とあっけなく明かされること。すると、この宇宙船が旅立ったのは一体いつ?そして、今スカイタワーでヴィクトリアと共に働いているジャックは一体何者・・・?

<画面は架空?人間はクローン?>

スマホ全盛時代の今、それに憑りつかれている若者はみんな画面上で見るものと、実際に自分の目で見るものとの区別をどのようにつけているのだろうか?私はそう疑問に思ってしまうが、本作でもそれは同じ。ヴィクトリアと司令官サリーとの交流は、すべて画面とマイクを通してのものだ。本作ではビーチの登場によって、誰が敵で誰が味方か?という論点が浮上してくるが、それ以前に主人公のジャック自身が一体何者なのか?という大問題がある。ジャックがビーチによって拘束され尋問を受けるシーンを見ていると、いかにもビーチが悪者というイメージだが、さてそれは・・・?

2013年の今でも、『バイオハザード』シリーズや『アイランド』(05年)(『シネマルーム8』136頁参照)、『わたしを離さないで』(10年)(『シネマルーム26』98頁参照)などクローン人間をテーマとした映画は多い。また、ロボット技術が進歩すれば将来的には兵隊はすべてロボットという現実も考えられるうえ、イラク戦争では現実にも無人機が活用された。さらに、主人公のジャックが「記憶を消された男」という設定自体が最初から少し怪しげだ・・・。

何となくそんなイメージで本作を観ていたが、ネタバレ覚悟で書いてしまうと、本作では中盤からステーション49を本拠とするジャックの目の前に、ステーション52を本拠とするジャックのクローンが登場し2人は命がけの格闘をする羽目に。さあ、ここからがややこしいストーリーの本番の展開となるのだが、さてあなたの興味はどこまで・・・。

<ハリウッドも、自爆テロを推奨・・・?>

本作は登場人物が少ないうえ、トム・クルーズが二役で登場したりするから、どうしても彼のウエイトが大きくなってしまふ。たしかにトム・クルーズはそれに見合うだけの活躍をし、動き回っているのだが、空回りの部分が目立つ(?)のが本作の難点。しかも、クライマックスに向けてのフライトレコーダーの解析と、ジュリアを再びカプセルに入れて一緒に(?)司令官の元へ向かうストーリーがイマイチ理解しにくいから、高揚感が伴ってこない。

クライマックスに向けてのジャックは、既に自分が何者なのか?ジュリアはなぜ60年間も眠りについてたのか?ビーチたちは何を狙っているのか?等々をすべて理解していたから、そこではジャックの決断が最大のポイントになる。鶴田浩二や高倉健そして藤純子ら主演のヤクザ映画では、クライマックスは堪忍袋の緒が切れた上での死を覚悟した「単身殴り込み」と相場が決まっていたが、それはハリウッド映画でも同じ?もっとも、アメリカは自爆テロを最も恐れているはずだが、本作を観ているとひょっとして、ハリウッドも自爆テロを推奨・・・?

2013（平成25）年6月5日記